報徳@なう
２月号

次世代を担う子どもへの支援を！

コロナ禍で稼働が落ちている「子ども食堂」を活性化させる民間の力

昨年の秋くらいから、副理事長がリーダーとなって熱心に取り組んでいることがあります。それは、子ども食堂への食支援体制作りです。様々な団体にお願いして、東は平塚市、北は秦野市、西は静岡県東部に至る子ども食堂を調査しており、その数は実に六十か所以上。しかし、コロナ禍によって活動を停止しているところが多く、やっていても「食品の配布」というのが大半です。

そこで、報徳食品支援センターでは六十か所以上の子ども食堂に対して、定期的かつ継続した食支援を計画しています。現在行っているのは「ごはん、レトルトカレー、飲み物、お菓子」などをセットにしたミールキットの配布です。そのほか「冷凍弁当の配布」も準備しているところです。以前から「冷凍弁当」は時短で注目されており、箱根のホテルシェフの料理協力を得て「冷凍弁当」を作り、子ども食堂に配布する予定です。【文責・編集部】


↑小田原の子ども食堂での配布例。

対処から予防へ…　フードバンクの成果とは？

フードバンク活動の成果とは何か？　生活が困難な方に食べ物をお渡しする活動で、その地域社会がどう変わるのかと問われる事があります。一か月に一度だけ母子家庭の方に食品を渡しても、その方の食生活で足らない分を全て補う事は出来ません。

我々の活動は消防署の仕事と似ています。消防署は、火事を消す他に、火事を出さないようにすることが使命です。でも、結果として何件の火事を出さずに済んだかはわかりません。フードバンクも同じです。もし、我々が食品を提供していなかったら起こっただろう事件や悲劇を、防ぐことができたと思うのですが、わかりません。例えば、空腹で思わずコンビニでおにぎりを万引きしたような事件です。

でも、「いただいた食品で楽しい夕食を楽しみました。」というアンケートの返事をいただくと、そのご家庭に楽しいひと時を私達は届ける事ができたことがわかります。数字には出てきませんが、そのような小さな幸せをお配りするのが私達の仕事です。【副理事長　本岡俊郎】


↑配布食品を夕食などに活用している事例。


↑芦ノ湖畔で高齢者向けに食品配布を行っている様子。配布食品を集める工夫をして、野菜や味噌汁といった実際の食事を想定して食品配布を行っている。

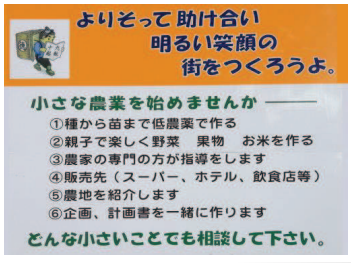
●報徳食品支援センターニュースレター「報徳@なう」
Vol.02 / No.002
●発行所
ＮＰＯ法人　報徳食品支援センター
●発行人：田嶋　享
●編集人：本岡俊郎
●編　集：千葉哲也
●電　話：０７０－８５５５－２１８９
http://小田原報徳フードバンク.com

１月の主な食品配布実績

【１】０４日：小田原市内の施設等へかまぼこ類配布
【２】０７日：箱根はまゆう会・芦ノ湖　３０世帯
【３】１８日：箱根はまゆう会・大平台　３５世帯
【４】１９日：カーサ・デ・アミーゴス（三島）
【５】２３日：開成町母子寡婦福祉会　２５世帯
【６】３０日：小田原市母子寡婦福祉会　６５世帯


↑６５世帯に食品配布をするための準備をすると、当センター内はこの状態になる。

報徳食品支援センター新電話番号
おとな　おやこ　GoGo　フードバンク
070-8555-2189
失業、仕事時間の短縮による減収、気が付いたら食べ物がない…今すぐ電話





【理事長より】

●今こそ小さな農業を！

今年は天候の不順で野菜の相場が高い物（１月：長葱、キャベツ、大根、人参）、安い物（１月：トマト、ブロッコリー）というように、激しく価格の変動がありました。露地野菜の耕作は天候に左右されます。なかなかうまく育ちません。我が子を育てるように目を向け、愛情をかけて接する必要があります。

コロナ禍で新しい仕事を探している人が増えています。そんな人には、私は今こそ小さな農業をおすすめしたいです。種まきから、販売先までお手伝いをします。【理事長　田嶋　享】

【二月の活動予定】

★箱根はまゆう会
●二月四日（木）@箱根湯本（小学校ピロティ）
●二月七日（日）@箱根町芦ノ湖（旧 湖畔亭）
【子ども食堂】
●二月二十日（日）お結びころりん（小田原市）

【ボランティアの募集】

http://小田原報徳フードバンク.com/問い合わせ/

●編集後記

食品配布活動をやっていると「それは行政の役割だから、民間がやるもんじゃない」などと反応する人がいる。では今、なぜ民間が食品配布をする状況になっているのだろうか？　さて、前号で「行政の福祉課や社会福祉協議会に食品支援を要請しても対応してもらえなかった人から食支援要請があった」ことを題材に問題提起をしたところ、福祉の現場からの反応は実に興味深いものだった。「職員みんなで心して相談対応しないといけないと引き締まる思いになりました」という実にまっとうな反応もあったが、そうでないものもあったのだ。他山の石、以て玉を攻むべし。（哲）